

あだし野へ

有森 信二

入学試験、評議会が二回、合格発表、それに卒業式。これが、自分に残された仕事の全てである。

浦松丈助は、斜め前方から吹きつけてくる雲の粒の形が、それとわかるまでにスピードを落とし始めた新幹線の車窓に身を寄せ、そう考えている。

三十五年になる。三十五年の間、来る年も来る年も入学試験や卒業式や入学式を繰り返してきた。それが、丈助にはどうとう来る年がなくなってしまった。卒業式まで、入学式がない。あと一か月余、つまり三月の末日限りで、自分も本当に卒業してしまう。

つい最近まで、ずい分先のことと思ひ、いや正直にいえば、今の今まで忘れようと努めてきた定年のことだった。それが、「補佐は、来年はこんな嫌な役目から開放されますねえ」という吉永のことばに、やれやれだよと笑ってはみたものの、関ヶ原あたりから舞い始めた粉雪を眺めるふりをして、急に押し黙ってしまったのだった。

丈助たちは、昨夜の夜行で博多を発ち、今朝の六時過ぎに大蔵省印刷局の中庭に着いた。

どこの大学よりも先んじて入試問題のひき渡しを受けようと、寒風に吹かれながら立ち、八時半の開門には一番乗りで倉庫に入った。

コンテナ一台分の問題紙と解答紙を検認し、受領すると、それぞれを梱包し、通し番号を書きつけ、トラックに積み込み、なお三度梱包の数を確かめ、最後に厳重にコンテナに封印をして、帰りの新幹線に乗った。

梱包の数が一個でも間違ったら首がとぶ、といわれるこの出張は、職員の数からも敬遠されるため、慣例として筆頭補佐と担当係長の役目になっている。

作業が終ったのは、かれこれ十一時近くになっていた。毎年のことながら、コンテナを積んだトラックが印刷局の中庭を出ていくのを見送ってしまうと、力が抜ける。疲れがどつとくる。と同時に、いい知れぬ安堵に満たされる。翌々日の早朝、大学の玄関にコンテナが横づけされるまでの責任とはいえ、一応の役目は果たし終えたのである。

丈助と吉永は、地下街の大衆食堂で一本ずつのビールで喉を潤し、定食で腹を満たした。

そんな吉永のいうことばである。他意のある筈もない。こんな仕事、できたら他の誰かに替わってもらいたいですよという、実際に作業に従事してきた者だけがいえる述懐と、丈助の最後の労をねぎらうつもりがいわせた、吉永ら

しい不器用なことばであるとはわかっている。

それに、吉永とは二年続きのコンビでもある。四十人ほどの部内の職員のうちでは、比較的ウマが合う方だと思っ  
ている。要領のいい連中や、陰ひなたのある連中が多いな  
かで、吉永はむしろ正直過ぎる部類に属している。

いいやつなのだ、と丈助は頭の中で呟いてみる。よくぞ  
自分の最後の仕事につき合ってくれた、と礼をいうぐらい  
の寛容さがあつてもいいのだ、と自分を責めたくなる。

そう思いながら、頬をひくつかせている。

「いいですよ、補佐は。土地も家もあるし、悠々自適です  
よ。好きな絵は毎日描けるし、ただ」

といいかけて、吉永は口を嚙んだ。そして、自分がいい  
かけたことの意味に気付いたのか、あわてて通路の方に体  
ごと向き直ってしまった。

八十も間近だった母、三十年連れ添った妻、それに七か  
月の身重だった娘の典子は、半年前の七月二十三日、長崎  
の丈助の実家で死んだ。

運、と一口にいう。丈助の場合は、まさに運としかいい  
ようのない縄目を常に歩いてきた、といつてよい。

七月二十三日は、父の三十七回忌に当たっていた。

四十五歳の働き盛りだった父は、戦中の混乱の中、戸板  
に乗せられ病院に運ばれる途中死んだという。盲腸炎だっ

た。考えてみれば、無念というほかはない死に様である。

その父の命日には、長崎に一人暮らしの母のもとに、毎  
年欠かさず妻と二人で出かけることにしていた。

そろそろ長崎の家を畳んで福岡に出てこないかと誘いを  
かけるのだったが、病院（原爆病院）のこともあるしなあ  
というのが口癖だったのに、そうよなあ、この夏過ぎたら  
いつてもいいなあというもので、丈助は、今の家の改築も  
しなければならぬし、長崎の家の処分することもはっきり  
しなければと、何度も電話のやりとりを交わした。

「へー、あの頑固なお婆ちゃんが何で気が変わったのや  
ろ。やつぱり、石段の家、きつうなつたんやろか。そんな  
ら、とうとうお父ちゃんの実家もおしまいというわけか」

近所に住む典子までもが聞きつけて、少し運動した方が  
いいって先生にもいわれたしと、だいぶ目立ってきた腹を  
さすりながら、お父ちゃんの実家が今年限りというのだっ  
たら一緒にいくといい出したので、お前も小さい頃ずい分  
可愛がられた口だから、今度は精一杯婆ちゃん孝行するん  
だなどということになり、七月二十三日の涼しいうちに博多  
を発つことにしていた。

その朝、身の回りの品や母への土産などを手際よくまと  
めて、駅までのタクシーを呼ぼうとしたとき、

「申し訳ない。夏休みに入ったというのに、学生どもが帰  
らんのだよ。半日でもいいんだが」

課長からの電話だった。ちょうど大学では、サークル室の建て替えをめぐって一部反対派学生との間でトラブルが続いており、丈助らも加わった長期の話し合いで、ようやう四、五日前に妥協点を見出すに至っていた。

「現場に立て看板を出し、テントを張り、座り込みを始めららしい」

と、課長の声はいくらか興奮している。

丈助は、妻と典子を予定の時間のタクシーに乗せ、明日の昼までにはいくからと伝えて、その足で出勤した。

結局、情報はデマにしか過ぎず、現場に出かけてみると、すぐ傍のグラウンドで補講ゼミの学生たちが、ロングランのソフトボールの試合をするというので、テントとスコアボード用の立て看板を持ち出したというのだった。

丈助は、このデマが運の分かれ目だったと思っている。

その夜、長崎は記録的な大雨に見舞われ、二百九十九人もの死者を出す大惨事となった。

「お父ちゃん着いたわあ。五十段の石段はやっぱりきつかったけど、寝っ転がっていると風が吹き抜けてよい気持。

なつかしいわあ、ちつとも変わってないよ。夜はね、ほら郵便局の前のお店で買った火花をするのよ」

「いつものとおり、光円寺の和尚さんに来てもらって、ちゃんと済みました。そりゃあ、お婆ちゃんはあるたのい

ないのが淋しそうで。でも、明日のお昼には会えるじゃありませんかと慰めてあります。これからお風呂に入って、疲れたので早めに寝みます」

「丈助、なんで来んかった。なに、明日。なにやら、早う会いとうて」

丈助が、戻って玄関を開けた途端に鳴り始めた電話をとると、三人が交互に出た。典子などは、つわりに悩まされてこの四、五か月というもの、どこへもいけなかつた解放感も手伝ってか、殆ど一人でしゃべり、笑った。鬼のいぬ間の洗濯とかで、今から飲みにいったりするんじゃないのよともいった。

その典子は、半年経った今もまだ、行方不明者の数の中に入っている。遺体があがらないのである。

母は落ちた庇の下から、妻は崩れた石段の間から早い時期に掘り出されたのだそうだが、すでに息絶えていたという。危険が迫ってきたため、家を出ようと玄関のあたりまで来たところで、土石流に吞まれたのではないかと二人を掘り出したという消防士たちが話してくれた。

「溜池をひっくり返したごたる降りじゃった」

「泥水が狂ったごとと走っていきよった」

「山も家も石段も消しとんでしまった」

「人間なんかひと飲みじゃけん」

そんな声を聞きながら、遺体収容所にあてられた病院、小学校、公民館を次々と走り回った日のことが、丈助にはつい先日のこととも、復員して焼跡をさまつた四十年近く前の、遠い日のことだとも思えてくる。

博多に上陸した復員船のなかで、長崎は全滅したと何度も聞かされていた。

「おつそろしい爆弾が落ちて、どこもかしこも焼け野原たい。誰もかれも焼け死んで、骨も残つちよらん。やけどをしたやつは、ぼろ布みたいな自分の肉ばぶら下げて、ものもいわんで死んでいきよる。それだけじゃないとぞ。《ピカッ》を見ただけで、怪我もやけどもなんにもないやつまで、コロコロ死んでいきよる。もう駄目じゃ。長崎はもうあかん」

身内の誰かを迎えに来たのであろう中年の男が、岸壁で二、三十人に囲まれ、身ぶり手ぶりで声高に喚いていた。

丈助は、それでも帰った。何をどう乗りついで帰ったものやら、今になってもはつきり思い出せない。

足の裏から寒さはい上がってくる夕暮だった。

市街地に一步足を踏み入れた途端、丈助は絶句した。それは、いいようのない殺戮の場だった。というより、抹殺の場というべきか。

街がないのである。根こそぎない。

これでは方に一つも助かるまい、と慄然とした。肉のとび散る前線で、ジャングルで、マラリアに侵され、飢えにさいなまれながらでさえ、方に一つという望みは失わなかった。しかし、これは百パーセント死だ、と思った。

ようやく氣をとり戻し、地を這い彷徨ったあげく、かろうじて焼け残ったとみえる一角に、なつかしい傾きかけたわが家を発見したときの喜びといったらない。

玄關脇にうづくまつていた黒い影がはねとび、口をぽかんと開け、棒杭のように立ちつくした。

母だった。

「本当じゃった。やっぱし本当じゃった。父ちゃんのいわしたことは、本当じゃった」

母は、喉をひきつらせながらそういった。

父は、戸板に乘せられ病院に運ばれる途中、丈助はきつと戻つちくる、俺が命に替えてでも絶対戻つちこらす、と夢うつつのうちに叫びながら、息絶えたのだという。

国民学校の代用教員をしていた二つ違いの姉は、校舎の下で圧死。勤労働員の十五になる妹は、背中と首にやけどを負って、それでも一か月余り生き永らえたという。

「三人も焼かんならんかった。次から次に三人もよ。一人で焼いたとよ。返しちくれ、返しちくれと泣きながら焼いた。あつけないもんじゃ。ほんと、虫けらみたいにあつけないもんじゃ」

破れたかすりの袖で涙を拭きながら、母はいった。

「それでもな、それでも街ん中の人たちに比べたら、まだ恵まれてる方かもしれん」

ふっと溜息をつき、そして毀れものを見るという眼差しで、丈助の髭面をまぶしそうに見上げた。

母は、動かないといった。

「三人も眠つるとよ。ご先祖様もみんな眠つとらすこの土地を、離れらるるもんか。よか、わしのこととは心配するな、どこへでんいけ」

狭い田畑を耕しての暮らしが二年も続いた頃だったろうか。福岡に住む工業学校時代の友人から、鉄道に就職口があるという話が舞い込んだ。それと前後して、ビルマの同年兵からも帝国大学に口がある、とのハガキがきた。

丈助は、一緒に福岡にいこうと誘ったのだが、母はとうとう首を縦に振らなかつた。

「ただし、条件がある。父ちゃんの命日をみんなの命日にしよう。一年に一遍だけは、どんなことがあっても必ず帰つちくるとぞ。もしかしたら、お前は父ちゃんの生まれ替わりかもしれないのだから」

と母はいった。母はその頃、正体不明の微熱やめまいにおそわれ始めていた。

丈助は、結局二番目に面接を受けた帝国大学の方に雇と

して入った。工業学校で電気を専攻した丈助にとつては畑違いの、しかも給料は鉄道の三分の二ほどしかない大学の方に入ったのには訳がある。

同年兵の山下がどう働いてくれたかは知らないが、半月分の給料だといつて千円をくれたうえに、穴蔵みたいな事務室の四、五人に、早々と紹介してしまつたからである。

「これからは、ここの違いで偉くなれる時代だ。小作人のせがれでも、教授にだつてなれるぞ。なにせ、民主主義の世の中だからなあ」

山下は、七、三に分け、ポマードで光らせた頭を指さしてみせた。

六年経つて、丈助は係長になつた。山下は、一年前になつていた。

母は、一か月程度の入院と、退院を繰り返していた。それから十五年経つて、課長補佐になつた。酒で小さな失敗をしでかした山下を抜いていた。学園紛争に火が点き始めた頃である。

連日の徹夜だった。二の腕の骨にひびが入るほど、ゲバ棒で殴られたこともある。眼鏡も二回割られた。権力の手先だ、犬だ、と罵られた。

それでも若かつた。典子はまだ中学生だった。お前たちのいいなりになつて大学を解体したら、自分の生活はどうなるという反発が丈助を支えていた。この頃から母は、見

違えるほど健康をとり戻し始めていた。

「浦松は要領のいい男ぞ」

「あいつは野心家だ」

丈助は、上級のポストが欲しいとは思わなかった。補佐でも出来過ぎていると思った。しかし、仕事の手を抜くということは、自分にも部下にも許さなかった。そんな丈助を、誰もが出世猿だ、と皮肉った。

実際、過労からくる胃潰瘍で倒れなかったら、課長か部長ぐらいにまではなれていたかもしれない。本館封鎖の攻防のさ中に吐血して倒れ、胃の三分の二を切除するという手術で、一年を棒に振ってしまったのだった。

その丈助のポストに昇進した山下が、就任早々三か月目に脳血栓で死んでしまった。

「しつかり養生しろ。あとのことは心配せんでいい。今度、俺も必死だからな」

と、晴れがましい顔で術後の丈助を見舞ってくれたそのわずか八十日後に、まさか山下自身が息絶えるとは、思ってもみなかったに違いない。

就任した途端に、機動隊導入の是非をめぐる揺れた大当局的の評定が、まだその仕事に慣れない山下の命を縮めたのではないかといわれている。

「一杯どうです、補佐。少し景気よくやりましょうよ」

つまらなさそうに、一人でちびりちびり飲んでいた吉永が、丈助の袖をついた。もうかなり出来上がっている。丈助は、ちょうど通りかかった車内販売嬢を止め、吉永のためにビールとワンカップとつまみを買った。

「昼間に空きつ腹で飲んだのがこたえたのか、少し悪酔いしたようでねえ。済まないが、しばらくこれでやってくれないか」

といっておいて、自分は新しい煙草の封を切った。

新幹線はかすかなきしり音をたてて速度を緩めながら、京都駅のホームにすべり込んでいく。アタッシェケースを手にとり着きつちり着こなした男や、土産物の袋を抱え子供の手を引いた女たちが、寒そうな目をして出口の方に移動していく。

止まったと思うと、ガラリとドアが開いた。と同時に、車内の暖気が駆け去っていく。駅で降りた客の分の幾倍かの暖気が抜け出て、寒気が替わりにしのび込んできた。

発車のベルが鳴り始めた。駅のアナウンスが、次は新大阪あ、と告げている。間際にホームに着いた客であるう、背中を丸めてとび込んできた男が、通路側の吉永の膝に嫌というほどにぶつかって、反対側の椅子にもんどりうって尻もちをついた。

このとき、丈助は、反射的に立ち上がった。吉永の上体

が、いきなり被さってきたのを防ぐためではない。

ぼんやりしていた頭に、瞬間「あだし野へ」という声が聞こえたのである。

ドアに向かって突進した。ベルが鳴り終り、ドアは閉ざされようとしていた。間一髪だった。コバルトブルーの車体は、躊躇いもなくホームをすべり始めた。

息を切らして立つ丈助のすぐ目の前を、吉永の頓狂な顔が流れ去っていく。

「頼むぞお」

丈助は、自分でも訳のわからないことばを、数十メートル先の点になった吉永に向かって叫んだ。叫んだ後で、カバンもコートも、吸いかけの煙草も車中に置いたままなのを思い出した。

改札口を出て、大学に電話を入れた。総務課の女性が出たので、今日中には帰るつもりなので、吉永君には心配しないよう伝えてほしい、といつて切った。

これでいい。トラックは翌々朝には大学に着く。それまでの準備は、課員たちにまかせておけばいい。自分は、あと一か月余りの人間ではないか。役人の組織など、一人や二人が突然倒れたりしても、誰かがなんとかしてくれるようになっていく。

部長と課長が逆転したって、補佐と係長が逆転したって、仕事の能率はそうたいして変わるまい。

役所とはそんなところだ、と丈助はこの頃思い始めた。

俺がいなければ、と四六時中気を張り詰めていた紛争時のことなど、遠い日の奇怪な夢物語でしかない。

「浦松さんは、別人みたいに気が弱くなった」

「あれじゃあ、仕える部下がかわいそうだ。第一士気が上からんし、若手の昇進もストップさ」

「退職金稼ぎの穀潰しなのさ」

あの七月二十三日以来、こんな陰口がささやかれていることを、丈助は知っている。そして、確かにそうなのだ、と思う。この自分の無能ぶりを責めるしかない部下の哀れさを、痛切に思いやる。

嵯峨野には、以前に一度来たことがある。妻の所属していた句誌の吟行会に、信州からの出張帰りに合流したときのこと、五年ばかり前になる。そのときは、野之宮、落柿舎、祇王寺あたりを散策した。

落柿舎で、句には殆ど素人の丈助も勧められるままに、ししおどしのはね上がる様を詠んだ句を、主宰からとても素直に詠めていると誉められ、気恥ずかしい思いをしたことを覚えていく。

祇王寺が終ると、平安の古来からの葬送の地として知られている念仏寺まで足を伸ばすことになっていたのだが、こやみなく降り続いていた雨が土砂降りに変わったため、

とうとういかずじまいだった。

その道を歩いている。あのとときは、一本の傘の下で、妻も丈助も肩をすぼめ、裾を濡らしながら歩いた。今は、痛く冷たい雪の粒を頬に受けながら、一人でのぼっていく。

寒い。風も出ている。襟首を伝い落ちる水滴が、全身の体温を一気に奪い去っていく。

細い道を左方に折れると、ゆるやかな傾斜になる。その傾斜のいく手で、ときおりゴウと山が鳴り、雪煙りが上がる。人通りはない。

道端の間口の狭い土産物屋も、ガラス戸を半ば閉ざしている。竹細工の鹿か鳥かの置物が、店先でたよりなげに首を揺らしている。

突然、なにものかが空をかすめた気配にふり仰ぐと、二羽のカラスだった。羽音もなくついと傍の樹の頂きにとんだカラスは、丈助を見下ろし、一声ギャアと鳴いた。うねりのぼるいく手への進入を阻むかのごとき、威嚇の鳴き声である。

丈助はひるんだ。どこからか誰かの目に射られている、そんな気がして思わず後ろを振り返った。

後ろには、幾筋かの雑木の枝々がしろじろと光る道をせわし気に掃いているだけで、なにもない。誰もいない。

そのときである。なにものかの目に見えない力がすうつと背後にしのび寄り、まつわりついたかと思うと、丈助の

背中を押し上げ始めた。幾本かの濡れそぼった手が、丈助の手を、足を抱え上げ、操り、上へ上へと運んでいく。

あらがおうとしても、振りほどこうとしても、その手は強靱な力で丈助の肢体にからまり、離れない。

どこか、奈落の底へ突き落とされるためにせめぎ上げられていく。そんな酩酊感が丈助の脳裏を波うち、よぎっていった。

気が付いたとき、丈助は雪の河原に立っていた。幾千という石仏が、頭にひとひらずつの雪をいただき、肩を寄せ合い、うづくまつている。その河原の真中に、いつの間に迷い込み、いつの頃から立っていたのだろうか。

丈助は、金縛りに会ったみたいだった力から、いつの間にか解かれているのを知った。頭はすつきり晴れている。手も足も軽い。よく眠ったあとの爽快さに似ている。

ゆっくりとあたりを見回した。目にしみるばかりの雪の白さである。雪は、一つ一つの顔をもつ石仏のどの頂きにも降り積んでいる。その小さな仏たちの寄る地中から生じ、仏たちに手をさし伸べかけた形の紅葉の精緻な枝々にも、雪は静かに積んでいて、ゆらりともしない。

これは、まがうことのないあちらの世界だ、と丈助は目をしばたいた。

どこからか音が聞こえてくる。低くうねり、高く歌い、



誰かが舞っている。

耳を澄ましていると、雪の甘さよ、雪の白さよ、と歌っている。さらさら翻る衣擦れの音も混じっている。笑声があがる。

雪の園、永遠に輝り、と歌は続く。

丈助は、陶然として、その白い世界の中に、自分も舞い下りたい衝動にかられた。

そのとき、背後で山が激しく鳴った。地が揺れ、空が黒ずみ、雪が蒼さめ、雪崩落ちた。

丈助は見た。雪の底から黒々と渦卷いた女の髪が立ち上がり、焼けただれた肉片をぶら下げた男や女がぞろぞろ列をつくり、手のないものや、顔を押し潰されたものや、肉も骨も失ったものたちが、火の中を、水の中を、次々に渡っていく。

そして、その幾千とも幾万とも知れないものたちの、ひしめき合う呻吟。

「お父ちゃん、ここよ。どうして早く来てくれないの。苦しいのよ、すごく苦しい。わたしの赤ちゃんどこ。どこなの」

「どうしてでしょう。動けないのです。あなたのところへいきたいのに、動けないのです」

「丈助、父ちゃんがおらん。どこにもおらんとぞ。早う来

い、お前だけでも早う来い」

「冷たいよう、寒いよお。この雪どけておくれ。重くて、辛くてやりきれないよお」

丈助は、耳をおおい、目をふさぎ、訳のわからないことを叫びながら走った。走っても走っても、なにものかが追いかけてくる。なにものかに突き当たる。

その合間をひき千切り、懸命に走った。深過ぎる雪にずぶずぶと足をすくわれては倒れ、起き上がっては倒れた。

「もしもし、お客さん。もしもし」

誰かが丈助の肩を叩く。ハッと振り向けば、一人の若い僧が怪訝そうな表情で立っている。

「確か、誰もいらつしやらなかつた筈ですが」

この僧が五時の閉門の際に河原を巡回したときには、誰もいなかったのだという。なにしろこの雪ですからと、僧は空を仰いだ。空は、山の端にわずかにうつつらと白みを残すだけで、その暮れなずんだ空から、ひっきりなしに大粒のボタン雪が落ちてくる。

「午後から珍しい大雪になりましたね。私はずっと受付に座っておりましたが、そうです、三人の女性の方が一組お参りに見えただけで、あとはどなたも」

と僧は、丈助が一体どこから入って来たのかと、疑り深そうな顔になる。

丈助は、濡れた背広の内ポケットから札入れをとり出すと、これで弔っていただけないかと、典子たちの名前を記した紙片と一緒に渡した。

幼い頃みた夢で、丈助には六十の今になっても忘れられないものがある。それは、最初にぎやかな空間のなかに涼し気な地球が浮いていて、人や動物や植物がのびのびと棲息していたのだが、あるとき地球は桃色になり、オレンジ色になり、ついには爆発して粉微塵になってしまった。

そのとき、ああ、ぼくたちの墓場がないと叫び、自分の大声に驚いて目を覚まし、傍にいる父と母と姉妹の寝顔をしげしげと眺め、安心して再び眠りに入ったことを覚えていく。

丈助は、夜行列車の窓を流れていく遠くの灯を見つめながら、ああここにも夕餉があり、なに気ない会話があるのだと思ってみる。父がいて、母がいて、子供がいる。そんなたわいもないことを思うだけで、灯がにじんできると。

明日からは、倒れてもいい。出世猿だといわれた頃の自分に戻ったつもりで働いてみたい。

そして、広すぎる五DKの家に、どっかとおぐらをかいて、一人座っていたいと思いは始めている。

(丁)